

はじめに

昭和62年（1987年）の調査によれば、市域には15棟の茅葺き住宅が報告されています。（『越谷市草葺民家調査報告』日本工業大学建築史研究室 昭和62年3月）現住の茅葺きの家は今ではほとんど見られなくなりましたが、この屋根の特長からは現代や将来に考慮しなければならないいくつかの示唆があるように思えます。



「旧東方村中村家住宅」は越谷市域で最も古い住宅とされています。（当館リーフレットをご参照下さい。）寄贈後はかつての「見田方遺跡公園」に移築されました。これはその頃の写真です。

当住宅は5つの棟を持つのが特徴で、近世の名主の家の様式を有しています。

この写真は、上の写真赤○の部分を下から見た軒の様子です。



かやぶ 茅葺き屋根のこんな疑問

- Q1：この屋根の材料・茅（萱）って何？
- Q2：どうやってこんな姿になるの？
- Q3：草なのに雨漏りしないの？
- Q4：現代の住宅とどう違うの？

これらの ^{はてな}？ に、後のパネルでお答えします。

(1) 「茅」という植物

「茅」は固有の植物名ではなく、イネ科の植物の総称です。「萱」、「葭」とも書き、葦（よし または あし）、ススキ、おぎ かりやす荻、かりやす荻安、スゲ、チガヤなどが含まれます。

温帯から冷帯の広い地域に分布し、特に台地や山地にはススキ、河川や湖沼にはヨシ、オギなどが多いようです。

茅、葦などは古来建築材としてだけでなく、歌に詠まれたり染色の材料にもなってきました。

（『埼玉の草屋根葺き』(埼玉県立民俗文化センター 1997年) などより）



冬の茅場(渡良瀬遊水地): 茅は人の背丈以上あります

(2) 茅場

民家には必ず必要だった茅を安定して確保するために、あちこちに茅場がありました。市域は低地にあるため、川に沿って存在しました。かつての絵図や地図にそれが見えます。屋根葺き用に適した茅を育てるために、次のような管理が大切でした。

- ◆越冬した古茅や雑草・雑木が混在したものは不可。
- ◆肥沃な土地の茅は太くて柔らかいので屋根材としては不適。そのため、腐葉土となる枯れ葉や落ち葉を取りのぞく。
- ◆夏：蔓や雑草などを刈る 晩秋～早春：茅刈り 3月後半：野焼き

現在の市役所
辺り

瓦曾根村茅場

溜井の堰
今のしらこぼと
橋付近

現在の市役所
辺り

日光道中

江戸時代の瓦曾根溜井の絵図

(『八潮市史史料編近世II』掲載 個人蔵)

日光道中

迅速測図越ヶ谷駅及大澤町近傍 明治13年(1880年) (国土地理院)



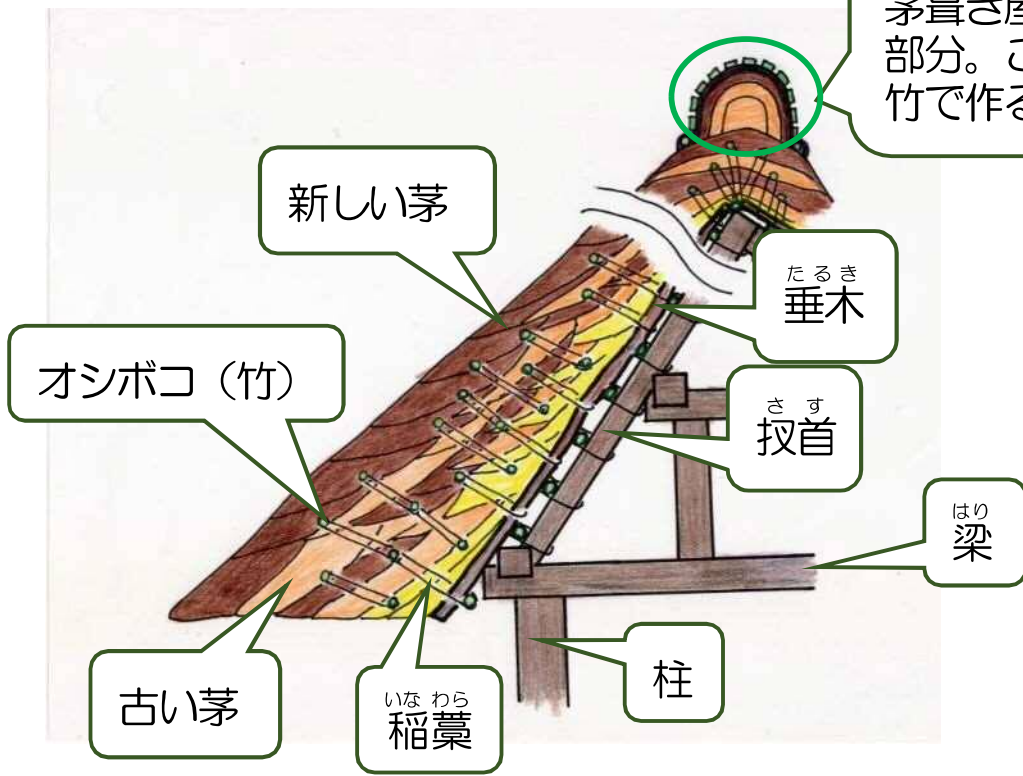
早春の溜井

写真中央対岸側に茅場がありました。現在は左側に葦原が見えます。右端は石堰があった辺りで、今はしらこぼと橋があります。

2

茅葺の屋根

(1) 構造



グシ
茅葺き屋根の棟の
部分。これも茅と
竹で作る。

屋根の一番下に稲藁を葺き、
その上に古い茅と新しい茅を交
互に葺きました。葺いた茅の厚
さは60cmにもなりました。

藁や茅の層と層はオシボコ
(竹)で挟むようにして縄で結
わえました。この作業で縄を通
す際には竹槍のような「ハリ」
を用いて、まさに縫うようにし
ました。

(2) 作業工程 (旧東方村中村家住宅の場合)

当住宅が寄贈後にかつての見田方遺跡公園に在った時に
行われた屋根の葺き替えの状況をご紹介します。

- ◆時期・・・昭和62年(1987年)1~2月
工期(実働期間)25日
- ◆作業人員・・・茅葺き専門職6名、補助員6名
- ◆使用材料・・・茅:10000束、稲藁:6000束
荒縄:60束、杉皮:30束、竹:41束
針金:15kg、他

① 茅の分類

長めで堅いものと短めで柔らかいものに分け
て束ねます。



② 古い茅を剥がす作業

それまでの茅を取り去った後の主屋の屋根。



茅を取り去った後、主屋内部から見た屋根。太い
梁や桁、小屋組み、垂木などの構造物が見えます。



③ 屋根の下の方から葺いていく

最初に軒端（屋根の下部）に稲藁を葺きます。



予め束にしておいた稲藁を、荒縄で固定していきます。



④ 茅を固定していく

荒縄を付けた竹の「ハリ」を内部に差し入れます。
屋根裏にいる別の人が受け取り、差し替えします。



屋根裏から差し替えされたら、オシボコで挟むようにして荒縄で縛ります。



⑤ 茅の状態を調整する

葺いた後、「ガンギボウ」という道具で茅を整えていきます。



⑥ 棟（グシ）を作る

棟（グシ）は屋根の峰の部分です。旧東方村中村家住宅には5つの棟があり、それぞれにグシが形成されています。（当館土間のジオラマをご参照下さい。）



屋根の峰（棟）でグシの基礎を作っています。



予め作っておいた「枕」を入れて、その上に杉皮などを被せ、竹を設置します。



裂いた竹を等間隔で被せ、丸竹を両側から渡して挟み込み、針金等で縛ります。

⑦ 整形

^{はさみ}鋏を使って、屋根の上から下へと整えていきます。既成の図面はありません。その屋根に合わせて整えていきます。屋根全体を見ながら数人で整えるのは、とても難しい作業です。

完成した全体像を、最初のパネルでもう一度ご覧ください。



使っているのは植木鋏に似た鋏です。屋根全体を見ながら整えていきます。



屋根に取り付けた足場の横木を外しながら、上から下へ刈っていきます。

(1) 品格ある軒反り^{のきそ}

右の写真は式台付玄関の屋根です。軒端が軽く反っています。これは「軒反り」という古代寺社建築の意匠を受け継いでいるものです。この曲線は鋏だけで作られます。この感性と技術を、茅葺き職人の方々は日々磨いています。



(2) 雨漏りしない仕組み



十分に乾燥させて堅くなった茅同士の間わずかな隙間に、雨水が保たれます（毛管現象又は毛細管現象）。さらに屋根の勾配（傾き）が45度くらいで急なため、その雨水は下方に流れていきます。

(3) 茅葺き屋根の長所と短所

【長所】吸音性、断熱性、保温性、通気性に優れています。

【短所】火に弱いことです。

(4) 土間に天井がない理由^{てんじょう}

部屋に天井が張られたのは客間です。住人の居住スペース、納戸（寝所）や茶の間（板の間）には天井が張られなかったこともあります。そして土間は基本的に天井はありません。見上げると屋根の裏側が露出して見えます。土間には竈、板の間には囲炉裏が設えてあり、火を燃やしました。この時発生する煙は屋根の内側に広がって、害虫を追い出したり煤で雨漏りを防いだりしてくれるのです。

おわりに・・・

茅葺き屋根の家が伝えていること



寄贈前の旧東方村中村家住宅

南側から撮った写真です。敷地の北西には背の高い樹木が屋敷林としてありました。冬の北風や夏の強い西日から守る役割をしました。落ち葉や枯れ枝は焚き付けや肥料に使いました。門と建物入口の間は広いスペースで、作業をする場所だけでなく、名主を務めた家では行政の場（村人に布令を伝えるなど）でもあったでしょう。

この写真のような住宅が現代住宅と異なるのは次の点です。

◆“孫・子の代まで”使えるように考えられた造り。

短くとも100年、できれば150年以上保たせられるように造られています。それは今のよう
に物資の大量生産が十分ではなかったことや、三世代以上の同居が当たり前だったこともあるで
しょう。

◆建築材のほとんどは植物由来。

- ・建物の骨格材（柱、梁、桁、敷居、鴨居 等）
- ・屋根の部材（垂木、棟木、隅木、萱材）
- ・壁の中の材（竹、縄、藁）
- ・建具の紙（楮、ミツマタ）

→2つと同じ材料はないので、一つ一つの材の特徴を把握して適材適所で用いています。

→使えなくなった部分は補修、リフォーム→再利用と廃棄。廃棄物は焼却して灰を肥料にする。

◆軒の深さが場所・方位によって異なる。

雨や日差し、風の通りを現代よりも考慮して造られています。

以上のことから・・・

★自然の営みの循環や社会の状況を考えて建築されています。